古京風韻

長岡京漢詩作詩研修会

平成二十五年十二月発行第八号

古京風韻　第八号　目次

一、漢詩作詩研修会　古京風韻　第八号発行に寄せて　小林清夫……1

二、漢詩集

賀古京風韻第八号発行　小林清夫……2
堤上賞花　伊藤鉄雄……3
鵜飼舟遊　今西　進……4
洒門鎮懐古　岩松峰明……5
古稀偶成　鵜野高資……6
感謝吾自祖母頂戴遺物眞珠賦詩　岡田一葉……7
散策渉成園　加藤初恵……8
歴史探訪（岐阜城）　川勝芳三……9
八条池逍遙　北野宗通……10
聴杜鵑於西山　櫛谷元紀……11
嘉会　久保正鳳……12
夏日即事　小西幹夫……13
氏神初賽神　小西久子……14
四国霊場旅　小林亨江……15
嵐山古寺拝観　阪下よね子……16

春　寒　坂根幸子……17
懐吉田松陰　櫻井登志子……18
新秋偶感　佐々木一景……19
旅行岐阜懐古　曽根高美倭子……20
初夏新緑感懐　竹内鏡子……21
訪西山竹林公園　竹下信治……22
夏　景　谷岡静子……23
参癸巳女節分會　玉岡瞳……24
題家族和親　辻美代子……25
題伐採後香木　土田利子……26
避暑坐庭裏縁臺茫望見周山　藤米田昌隆……27
再会恩師回顧昔日　富田祥子……28
初秋即興　中川岩雄……29
登木曽駒ケ岳　中島圭介……30
盛　夏　西田典右……31
登比叡山　二谷隆興……32
山陰食楽行　野村將……33
城南宮曲水宴偶感　橘本孝司……34
初夏芦生散策　長谷川功……35
詠白銀蔵王　八田美子……36

光明寺雪景　林　克宏……37
夏日追涼　林　幸子……38
想斉物論　林　信孝……39
流碑祭護国神社偶感　福岡太郎……40
消夏京都洛北　福山真知子……41
八重之櫻（新島襄の妻）　藤田　忠……42
巡山背古道　古川元彦……43
高速公路裂緑野　本庄武男……44
看竹　前田正子……45
春日偶成　水木静爽……46
蓮花　溝畠隆雄……47
祝孫高校入学　山際和子……48
過古稀吾想　湯川圭造……49
耶馬渓　脇海道聰子……50
夏日雑興　和田一栄……51

三、漢詩作詩研修会の歩み活動報告……52

四、編集後記……56

長岡京漢詩作詩研修会「古京風韻」第八号発行に寄せて

長岡京漢詩作詩研修会　代表　小林 清夫

今年夏の異常に驚きを感じました。梅雨入りと梅雨明けが例年になく早かったこと、また、梅雨明け後に記録的な大雨に見舞われ、各地には甚大な被害があり「特別警報」が発表されるという大気の不安定に驚愕しております。

こうした時期に、私たちの作詩研修会は、大阪大学、文学博士、合山林太郎先生を講師にお迎えし、藤井竹外「芳野」詩について―幕末の漢詩と関西―と題して、講義を受けました。皆様もよくご承知の詩であり、大変馴染深く興味がわいてきました。

絶句竹外と称され、人となりの解説にはじまり、摂津高槻藩の人、酒をこよなく愛し興到れば「奇」という言葉を連発した話、頼山陽に詩を学び、常に推敲を重ねた偉大な詩人として紹介をされました。その一例を挙げますと、

この様に努力した結果、藤井竹外の詩集序跋の評として、「詩は清らかで美しい、表現力に優れているされ」、篠崎小竹は竹外の詩は清くやせており、芳香があり、清潔である、その上、人品は梅花のようであり、世俗を超脱し言葉の用い方が警抜、と評された。山陽の後、星巌に師事し、名を挙げている。

私たちは「芳野懐古」を勉強するのに「芳野」を詠んだ傑作として、「芳野三絶」が挙げられます。その詩文の共通する点は、後醍醐天皇を偲び吉野朝の歴史を懐古し勤王への思慕の念が表現されているところに、人口に膾炙された意味があるようです。

残念ながら紙面の都合で詳細を記すことが出来ませんが、如意輪寺は後醍醐天皇の勅願寺で、楠正成の「かへらじとかねて思えば梓弓亡き数に入る名をぞ留むる」が蘇ります。

合山先生の熱心な講義に触れ、詩作を通じての詩句表現、言葉の重みを痛感させて頂き今後も研鑽いたす所存です。

今後とも当会にご支援ご厚情を賜りますよう、よろしくお願いしご挨拶とします。

賀古京風韻第八号發行

小林 清夫

教学相長騒社盟

教学(きょうがく) 相長(あいちょう)ず 騒社(そうしゃ)の盟(めい)、

共窮高趣細論評

共(とも)に高趣(こうしゅ)を窮(きわ)め 細(こま)やかに論評(ろんぴょう)す。

満腔心意文奇集

満腔(まんこう)の心意(しんい) 文奇集(ぶんきしゅう)、

抜地倚天風月情

抜地(ばっち) 倚天(いてん) 風月(ふげつ)の情(じょう)。

(訳文)

一歩一歩共に研鑽を積む私達の作詩研修会は、
一緒に論評を加えながら懸命に努力を重ねております。
茲に八号の会員皆様の情緒溢れる滋味に満ちた作品を拝読し、
詩文の実に雄大ですばらしい趣のある風流の楽しみを味わうことができ感謝しております。

堤上賞花

伊藤 鉄雄

天王山下向幽徯
安慰春風背割堤
無數櫻枝香雪漲
賞花酌酒日傾西

天王山下 幽徯に向う、
春風に安慰す 背割の堤。
無数の桜枝 香雪漲り、
花を賞め 酒を酌み 日西に傾く。

（訳文）

天王山下の静かな小道を散策して行くと、
春風に心が落ち着く背割の堤にやってくる。
堤の無数の桜の枝に花が満開となり、
花を賞め酒を飲んでいると知らない間に時間がたち日が西に傾いている。

鵜飼舟遊

今西進

蒼然嵐峡恣風流
爝火清漣夜色幽
練熟手工魚忽躍
拍聲逸興畫中収

蒼然(そうぜん)たる嵐峡(らんきょう)風流(ふうりゅう)を恣(ほしいいまま)にす、
爝火(しゃくか)清漣(せいれん)夜食幽(やしょくゆう)なり。
練熟(じゅくれん)の手工(しゅこう)魚忽(うおたちま)ち躍(おど)り、
拍声(はくせい)逸興(いつきょう)画中(がちゅう)に収(おさ)まる。

(訳文)

青々とした夕暮れの嵐峡は　涼しい風が吹き、
篝火が輝いて水面の清らかなさざ波に夜色は幽玄そのものです。
熟練の鵜匠の綱操りに、生けどりの魚ははね躍り、
拍声の風流な趣を画中に収めました。

泗門鎮懐古

岩松 峰明

老漢歸山既十霜　　老漢 帰山(きざん)して 既(すで)に十霜(じゅっそう)、
懐時生計適居郷　　時(とき)に懐(おも)う 生計(せいけい) 適居(てききょ)の郷(ごう)。
無肴獨酌鐘音夕　　肴(さかな)無く 独(ひと)り酌(しゃく)す 鐘音(しょうおん)の夕(ゆうべ)、
難忘泗門千里方　　忘(わす)れ難(がた)き 泗門(しもん) 千里(せんり)の方(かた)。

（訳文）
任地から帰国して既に十年が過ぎ、
いつも懐うのは　生活をした　中国の町のことです。
夕刻　独り酒を飲みながら　鐘の音を聞いていると、
はるかに　遠い忘れがたい　泗門鎮のことを思い出します。

古稀偶成

鵜野 高資

壬辰歳暮古稀郎
禍福人生夢一場
爲問窗前餘命事
老梅耐雪吐春芳

壬辰(じんしん)の歳暮(さいぼ) 古稀(こき)の郎(ろう)、
禍福(かふく)の人生(じんせい) 夢一場(ゆめいちじょう)。
為(ため)に問う 窓前(そうぜん) 余命(よめい)の事(こと)、
老梅(ろうばい) 雪(ゆき)に耐え 春芳(しゅんぽう)を吐(は)くを。

（訳文）

昨年十二月二十五日で古稀を迎えました、
良いことも悪しきこともアッという間の七十年でした。
これからの余生のことを考えながら窓の外を眺めていると、
老梅が雪に耐えて馥郁な春の香りを漂している姿に暗示を受けました。

感謝吾自祖母頂戴遺物眞珠賦詩　岡田一葉

偉容海若在滄溟
淖約水精年歳經
窈窕珠瓔惱彩飾
千秋恩愛使吾醒

偉容の海若（いよう　かいじゃく）　滄溟（そうめい）に在（い）ます、
淖約（しゃくやく）たる　水精（すいせい）　年歳（ねんさい）経（へ）たり。
窈窕（ようちょう）たる　珠瓔（しゅえい）　彩飾（さいしょく）を　惱（ほしいまま）にし、
千秋（せんしゅう）の恩愛（おんあい）　吾（われ）をして醒（さ）ませしむ。

（訳文）

すばらしい海の神様は青々とした大海原にいます、
しなやかな水の精に幾年宿しておかれたか。
美しい真珠は彩り飾るに適しており、
祖母の恩愛に今一度触れ私は自分自身を見直している。

散策渉成園

加藤 初恵

小春与友渉成園
古径逍遥心自温
鬱勃詩情吾意足
茶梅一片舞風翻

小春(しょうしゅん) 友(とも)と 渉成園(しょうせいえん)、
古径(こけい) 逍遥(しょうよう)し 心(こころ)自(みずか)ら温(あたた)む。
鬱勃(うつぼつ)たる 詩情(しじょう) 吾意(われい)足(た)る、
茶梅(ちゃばい) 一片(いっぺん) 風(かぜ)に舞(まい)いて 翻(ひるがえ)る。

(訳文)

小春の麗らかな日に友と渉成園をおとずれました。
小径をぶらぶらしていますと自然に心もほぐれ、
詩情がわき起こり気持ちがみたされます。
山茶花がひらひらと風に舞っています。

歴史探訪（岐阜城）

川勝 芳三

美濃稲葉聳厳然
幾度興亡情緒牽
閣上遠望東海渺
信長偉器古今傳

美濃(みの) 稲葉(いなば) 厳然(げんぜん)として聳(そび)え、
幾度(いくたび)かの 興亡(こうぼう) 情緒(じょうしょ)牽く。
閣上(かくじょう)より遠望(えんぼう)すれば 東海渺(とうかいかす)かなり、
信長(のぶなが)の偉器(いき) 古今(ここん)に伝(つた)う。

（訳文）

濃尾平野 稲葉山の山頂に厳然と聳え立つ、
幾度かの合戦毎に城主が変わり激しい世の移り変わりを感じる。
一方閣上に上がり一望すれば伊吹山から伊勢湾まで霞んで見える、素晴らしい眺め、
展示物を見れば織田信長の天下統一の夢にかける大きな器が今に伝わってくる。

（五月六日長岡京吟詠会主催の歴史探訪に参加）

八条池逍遙

北野 宗通

櫻雲綿綴碧池頭
滿目紛華玉軸優
少頃怪來春晝夢
暖風遲日恣閑遊

桜雲(おううん) 綿綴(めんてい)す 碧池(へきち)の頭(ほとり)、
満目(まんもく)の紛華(ふんか) 玉軸に優(まさ)る。
少頃(しょうけい) 怪来(かいらい)す 春昼(しゅんちゅう)の夢(ゆめ)かと、
暖風 遅日(ちじつ) 閑遊(かんゆう)を 恣(ほしいまま)にする。

（訳文）

八条が池のほとり、桜の並木が雲のたなびくように長くつづいている、
目前いっぱいに広がるその華麗さは絵巻物よりすばらしい。
しばらくの間、私はそれが昼間みている夢ではないかと思った、
温かい風の吹く春の日長、思い切りのんびりと散策を楽しんだ。

聴杜鵑於西山

櫛谷 元紀

紅飛紫散惜春情
緑樹如潮眼界清
午下無人庭院寂
一天裂帛訴冤鳴

紅飛紫散(こうひしさん) 春情(しゅんじょう)を惜(お)しみ、
緑樹(りょくじゅ)は潮(うしお)の如(ごと)く 眼界(がんかい)清(きよ)し。
午下(ごか)人(ひと)なく 庭院(ていいん)寂(しず)か、
一天裂帛(いってんれっぱく) 冤(むじつ)を訴(うった)えて鳴(な)く。

(訳文)

赤や紫の春の花の季節も過ぎ、
若葉が潮のように茂り見渡す限り清い。
昼間の庭には人影が見えずしずまりかえり、
そのとき、空からきぬを裂くような杜鵑の鳴き声がした。

嘉会

久保 正鳳

晝蟬聲賑京北空
緑葉靜揺覚微風
一時迎賓和敬境
自集百福團欒中

昼蝉(ひるぜみ)の声賑(こえにぎ)やかなり京北(けいほく)の空(そら)、
緑葉(りょくよう)静(しず)かに揺(ゆ)れて微風(びふう)を覚(おぼ)ゆ。
一時(ひととき)賓(ひん)を迎(むか)え和敬(わけい)の境(きょう)、
自(おのずか)ら百福(ひゃくふく)集(あつ)まる団欒(だんらん)の中(うち)。

（訳文）

夏の昼下がりお客様を迎え楽しいひとときを過ごしました。
心のかよい会うなごやかな語らいの中には百福が集まると言います。
嘉会＝よろこびごとの集まり。めでたい会合
和敬＝お茶の席で主人と客とが互いに心をやわらげ敬う心境。
団欒＝集まってなごやかに楽しむ事。

夏日即事

小西 幹夫

耕田雨潤稲苗新
景物薫風緑翠匀
蟬噪自聞時已夏
閑居獨坐養吾神

耕田(こうでん) 雨潤(あめうるお)うて 稲苗(とうびょう)新(あらた)なり、
景物(けいぶつ) 薫風(くんぷう) 緑翠(りょくすい)匀(ととの)のう。
蝉噪(せんそう) 自(おのず)から聞(き)く 時已(ときすで)に夏(なつ)、
閑居(かんきょ) 独(ひと)り坐(ざ)して 吾(わが)が神(しん)を養(やしな)う。

（訳文）

耕田に雨が潤って新しい稲が生育している、
辺りの景色も薫風がふき緑が一面に広がっている。
蝉の鳴く声が自然に聞こえ天地は已に夏だと感じる、
独り閑居して静かに坐してわが心を養う。

氏神初賽神

小西 久子

元朝氣爽此迎新
眷属相同賽后神
古殿寒燈心似水
千尋撼夢欲輸人

元朝（がんちょう） 気爽（きさわ）やかに 此（ここ）に新（しん）を迎（むか）え、
眷属（けんぞく） 相同（あいどう）して 后神（ごしん）に賽（さい）す。
古殿（こでん）の寒灯（かんとう） 心水（こころみず）に似（に）たり、
千尋（せんじん） 夢（ゆめ）を撼（うご）かし 人（ひと）に輸（いた）さんと欲（ほっ）す。

（訳文）

霜厳しく年が明けて元日又新しい年を迎える、
村の氏神さんに行くと親しくしている人々と挨拶を交わす。
古い社殿に燈火をお供えし合掌して心清らかになる、
今年も夢をみて人につくす思いやりの心をもらった気がしました。

四国霊場旅

小林 亨江

企望巡礼向鳴門
第一霊山覺佛尊
無礙丹心誦経典
大師慈恵浴深恩

巡礼(じゅんれい)を企望(きぼう)し 鳴門(なると)に向(むか)う、
第一(だいいち)の霊山(りょうざん) 仏(ほとけ)の尊(たっと)きを覚(かく)ゆ。
無礙(むがい)の丹心(たんしん) 経典(きょうてん)を誦(しょう)し、
大師(たいし)の慈恵(じけい) 深恩(しんおん)に浴(よく)す。

(訳文)

八十八ヶ処四国巡礼を志し、
第一番鳴門の霊山寺にお参りしてきました。
霊験あらたかな心でお経を読み、
弘法大師のご慈悲と仏様の恵みに感謝し巡礼を続けたいと思っております。

嵐山古寺拝観　　阪下よね子

寶厳院落訪陽春　　宝厳院落陽春に訪ぬれば、
楓樹苔茵緑已均　　楓樹苔茵緑已に均う。
獅子吼岩流水畔　　獅子吼岩流水の畔、
吟盟相約錦秋臻　　吟盟相約す錦秋にも臻らんと。

（訳文）

春と秋に公開する嵐山の天龍寺の辺にある宝厳院を尋ねて行きました。
楓の木は新緑、苔もすでに青く、陽光に映じて美しい。
獅子が吼えている姿の岩が山水庭園のほとりに。仏法の諺にちなむらしい。
美しい庭園に感動しながら、錦秋の季節に、また来ましょうと友と約束して。

春寒

夜来細雨薄寒加
一朶早梅纔著芽
興趣囘頭墻角下
幾経風雪待春花

坂根 幸子

夜来(やらい)の細雨(さいう) 薄寒(はくかん)加(くわ)わる、
一朶(いちだ)の早梅(そうばい) 纔(わずか)に芽(め)を著(つ)く。
興趣(きょうしゅ) 頭(こうべ)を回(めぐ)らせば 墻角(しょうかく)の下(した)、
幾(いく)たびか風雪(ふうせつ)を経(へ)て 春花(しゅんか)を待(ま)つ。

(訳文)

昨夜の小雨で寒さが加わる
一輪の早梅がわずかに芽をつけている。
庭を見まわしていると垣の角に、
幾たびか風雪に耐え春を待つ花々を頼もしく思う。

懐吉田松陰　　櫻井登志子

松下塾窓教俊英　松下塾窓 俊英を教き、
維新大業拠君明　維新の大業 君に拠ること明らかなり。
慨然牢獄神魂祀　慨然たる牢獄 神魂祀るを、
遺徳追懐報国誠　遺徳 追懐す 報国の誠。

（訳文）

萩の松陰神社には松下村塾があり此の処より維新の志士が生まれた。
維新の大業は松陰の至誠の信念による感化があったから成功したことは明らかです。
慨りながら牢獄に幽閉された叔父の家の跡に伊藤博文により松陰神社建立。
遺徳をしのべば世の人に長く報国の誠を伝えている。

新秋偶感

佐々木一景

啼罷殘蟬清氣流　啼き罷む 残蟬 清気流る、
孤蛩唧唧入新秋　孤蛩 唧々 新秋に入る。
誰知此夕傷心月　誰か知らん 此の夕 傷心の月、
獨凭書窗使我愁　独り書窓に凭り 我をして愁え使むを。

（訳文）

残蟬啼きやみ清らかな気が流れはじめ、
一匹のこおろぎが鳴き始めいよいよ秋に入った気配となる。
今夕美しくも又悲しい月を眺めていると、その光が書斎の窓から差し込み、自ら物思いに耽って感傷の世界にいることを、
誰が理解してくれるだろうか、理解してくれないだろう。

旅行岐阜懐古

曽根高 美倭子

訪到金華山麓頭　訪ね到る 金華山麓の頭、

荒城古道歳時流　荒城 古道 歳時流る。

可憐童幼疎開地　憐む可し 童幼 疎開の地、

憶得往年令客愁　往年を憶い得て 客をして愁えしむ。

（訳文）

私達グループはこの春岐阜に旅行しました。
お城を見学したり、当時の道を遊歴し、歴史をふりかえりました。
私は幼児の時、此の岐阜に戦時の疎開をしたと処であり、
往時を思い出し言葉で言い尽くせない思い出がつのりました。

初夏新緑感懐

竹内鏡子

山寺雨晴庭院風
鳩鳴何処晝濛濛
満山新翠帯精氣
森樹青嵐勝錦楓

山寺(さんじ) 雨晴(あめは)れて 庭院(ていいん)の風(かぜ)、
鳩鳴(きゅうめい) 何(いず)れの処(ところ)か 昼濛々(ひるもうもう)たり。
満山(まんざん)の新翠(しんすい) 精気(せいき)を帯(お)び、
森樹(しんじゅ) 青嵐(せいらん) 錦楓(きんふう)に勝(まさ)る。

(訳文)

雨上がりの山寺を尋ね祈寧しました。緑の新鮮な風が庭院を爽やかに。
鳩がお寺のあちこちで鳴いている。雨上がりの氛気が日中濛々として立ち上る。
山一面に青青とした新緑、なんとなく老身に精気が満ちてくる。
此の初夏の新緑の山気、若葉に吹き渡る風、いずれも秋の紅楓、錦秋に勝る。

訪西山竹林公園

西山碧樹散晨光
直幹清風乙訓郷
春筍故園豊麗潤
禽聲何聴繞幽篁

竹下　信治

西山(せいざん)　碧樹(へきじゅ)　晨光(しんこう)を散(さん)じ、
直幹(ちょくかん)の清風(せいふう)　乙訓(おとくに)の郷(さと)。
春筍(しゅんじゅん)の古園(こえん)　豊麗潤(ほうれいうるお)し、
禽声(きんせい)　何(いず)れにか聴(き)き　幽篁(ゆうこう)を繞(めぐ)る。

（訳文）
新緑の樹木が生い茂り朝日に照らされている、
乙訓の郷は青い竹幹、清風の爽やかな別世界。
春にはこの竹藪から竹の子が豊富に収穫ができ潤いを与えてくれる、
何れの処か鳥の声を聞きながら静かな公園を巡り歩く。

夏景

谷岡 静子

杜鵑一叫語留人
雨過雲開喜色新
發日葵花對炎夏
悠然靜臥獨懐春

杜鵑(とけん) 一叫(いっきょう) 語(かた)りて人(ひと)を留(とど)め、
雨過(あめす)ぎ 雲開(くもひら)いて 喜色新(きしょくあら)たなり。
日(ひ)に発(ひら)く 葵花(きか) 炎夏(えんか)に対(たい)す、
悠然(ゆうぜん) 静臥(せいが)し 独(ひと)り春(はる)を懐(なつ)かしむ。

(訳文)

ホトトギスが一声鳴き、人を立ち止め聴き入らせる、
長雨が上がり雲の切れ目から晴れ間が見えると心が晴れてうれしくなる。
向日葵の花が太陽に向かって開き、已に暑い夏日を想わせる、
ゆったりと静かに横になりひとり春を懐かしむ。

参癸巳女節分會

玉岡 瞳

晴光春暖蕩攘風
群衆賽神天滿宮
八秩巳年壇上立
追儺豆撒欲興隆

晴光(せいこう) 春暖(しゅんだん) 蕩攘(とうじょう)の風(かぜ)、
群衆(ぐんしゅう) 賽神(さいしん)す 天満宮(てんまんぐう)。
八秩(はちつ)の巳年(みどし) 壇上(だんじょう)に立(た)つ、
追儺(ついな)の豆撒(まめま)き 興隆(こうりゅう)を欲(ねが)う。

(訳文)

癸巳年、年女の私は長岡天満宮の節分会に参加させて頂きました、
当日は珍しく小春日和のような暖かい清々しい一日でした。
参拝者は境内を埋めつくしていました、敬虔なるお祓いを授けられた後、
壇上舞台にあがり皆様の益々の興隆を願って思いきり豆を撒きました。

題家族和親　　辻 美代子

泣盡劬勞憶往年　泣きて劬労を尽くし 往年を思う、
笑寓白屋族孫連　笑って白屋に寓り 族孫連なる。
一家栄茂團欒賜　一家の栄茂は 団欒の賜、
無恙而来福佑綿　恙なく 而来 福佑綿るを。

（訳文）

今迄夫婦 一生懸命頑張って来たことが思い出され、
御陰様で現在、息子 孫がわが家に帰ってきてくれて非常に感謝しています。
私達一家 お互いに和気あいあいとして絆が深まるのが以前からの望みでした。
これからも人生豊かに子供孫たちに囲まれて生きて行くことを祈っております。

題伐採後香木　　土田利子

櫻桃花下使人嬉　　櫻桃(おうとう) 花下(かか) 人(ひと)をして嬉(たの)しましむに、
忽被木刊心苦悲　　忽(たちまち)ち木(き)は刊られ 心苦(こころはなは)だ悲(かな)し。
可見茲蘇生命力　　見(み)るべし 茲(ここ)に蘇(よみがえ)る 生命(せいめい)の力(ちから)、
酣春脩茂是神奇　　酣春(かんしゅん) 脩茂(しゅうも)す 是神奇(これしんき)。

（訳文）

私は桜や桃を居ながらに眺めて 毎年楽しんでおりました。
突然本年春 蕾がついた木が伐採され非常に悲しみました。
でも残った木の生命力にふと感じ、
この春 枝も長く伸ばそうとする気は、まさに神のはたらきであります。

避暑　坐庭裏縁臺　茫望見周山　　藤米田　昌隆

竹風時雨過　　竹風　時雨過ぎ、
偶識鵲棲槐　　偶たま識る　鵲の槐に棲むを。
烟寺晩鍾散　　烟寺の晩鍾　散じ、
無端詩意来　　端無くも　詩意来たる。

（訳文）

通り雨も霽がり、竹林から爽やかな風が吹き肌に心地よい、（愈々秋の到来だろうか）
数日前に偶々知った事なんですが、我が家の庭の槐の樹に鵲が棲作りをしたそうだ。何か良い事でも有るのだろうか。
靄に霞む山間の寺（光明寺）で打ち鳴らす入り相の鐘の音が依依たる響きを残し夕闇の彼方へと広がり消えて行く、
何の前触れも無く突然に、詩を作りたいなぁ！という意欲が湧いて来た。
＊鵲棲槐→周の時代、我が身の出世を願い、庭に槐の木を植えたという故事による。

再会恩師回顧昔日

富田 祥子

交友迎師會美莊
交友(こうゆう) 師(し)を迎(むか)え 美莊(びそう)に会(かい)す、

悔爲盲者淚沾裳
悔(く)むらくは盲(もう)と為(な)り 涙裳(なみだしょう)を沾(うるお)す。

判人將叫空黃土
人(ひと)を判(わ)けるに叫(こえ)を將(も)ってしが 空(むな)しく黃土(こうど)、

曾矍容姿豈可忘
曾(かつ)て矍(かく)たる 容姿(ようし) 豈忘(あにわす)れ可(べ)けんや。

（訳文）

私達（チームメイト）は先生をお迎えして一席を設けました、
先生は突然目を患われご不自由で自然に涙が出てまいります。
でも見えない私達を聲で判断され、おどろきましたが今よみの国へ行かれ、
以前の元気なお姿がどうして忘れる事がありましょうか決して忘れられません。

初秋即興

中川 岩雄

山深獨坐野亭中
遙聽時禽白露風
一片敗荷令我識
秋情牽意夕陽融

山は深し 独坐す 野亭の中、
遥かに聴く 時禽 白露の風。
一片の敗荷 我をして識らせしむ、
秋情に意を牽いて 夕陽融る。

(訳文)

山の中の小さな東屋に独り坐し、
遥かに鳥の鳴き声を聴きながら涼しい風にあたる。
一枚の枯れたハスの葉にも ああ 秋が来たなあと感じさせられる、
この秋情に意を牽かれながら美しい夕陽を眺めている。

登木曽駒ケ岳

中島 圭介

風冷晴嵐秋興牽
紅黄山麓眼前連
眺望無極有天界
豈料吾能立石巓

風冷(かぜひや)かな 晴嵐(せいらん) 秋興(しゅうきょうひ)牽く、
紅黄(こうおう)の山麓(さんろく) 眼前(がんぜん)に連(つら)なる。
眺望(ちょうぼう) 極(きわ)まり無(な)く 天界(てんかい)に有(あ)り、
豈料(あにはか)らんや 吾能(われよ)く 石巓(せきてん)に立(た)つを。

（訳文）

風は冷く、よく晴れた日に立ちのぼる山気のもと、秋の気配はさわやかである、
山のふもとに燃えさかるような紅葉と黄葉が眼前に連なっている。
果てしなく開ける眺望はひたすらに大空にのみ存在するはずである、
このすばらしい景色が望める山の頂上に、なんと私が立っているとは感動を覚える。

「語意」中央アルプス木曽駒ケ岳（２９５６ｍ）日本百名山の一つ。

盛夏

南風細雨夏雲生
玄鳥飄飛鳴叫聲
山影西望連翠色
橋邊緑樹映江清

西田典右

南風(なんぷう) 細雨(さいう) 夏雲生(かうんしょう)ず、
玄鳥(げんちょう) 飄(ひるがえ)り飛(と)び 鳴叫(めいきょう)の声(こえ)。
山影(さんけい) 西望(せいぼう)すれば 翠色連(すいしょくつら)なり、
橋辺(きょうへん)の緑樹(りょくじゅ) 江(こう)に映(えい)じて清(きよ)し。

(訳文)

夏の風は雨をもたらし夏雲を生じる、
ひと夏を燕は喜び翻り飛んで鳴き叫んでいる。
山の姿の西を望むと緑色深めた山が連なっている、
又橋のほとりの木々が清らかな水面に映って美しい。

登比叡山

二谷 隆興

炎天跋渉秀靈山
無上三尊慈愛寰
不滅法燈傳教礎
一心清淨自身閑

炎天 跋渉(えんてん ばっしょう)す 秀霊山(しゅうれいざん)、
無上(むじょう)の三尊(さんそん) 慈愛(じあい)の寰(かん)。
不滅(ふめつ)の法灯(ほうとう) 伝教(でんきょう)の礎(いしずえ)、
一心(いちしん) 清浄(せいじょう) 自(みずか)ら身閑(みかん)たり。

（訳文）

清天に恵まれた日に私は比叡山に行ってまいりました、
そこには南北に連なる峰々に千坊といわれる延暦寺があり諸佛にお参り出来ました。
伝教大師の法灯は煌々と輝き、
私はすっかり疲れも忘れ身も心も洗い流され満足して下山してきました。

山陰食楽行

野村 将

夜来冬雨尚穿墻　　夜来の冬雨 尚墻を穿ち、

一路無尋解旅装　　一路 尋ぬ無く 旅装を解く。

絶品河豚盈溢酒　　絶品の 河豚 盈溢の酒、

悪天為幸浩歌長　　悪天 幸と為り 浩歌長し。

（訳文）

夜通しの雨がまだ垣根に降りそそぎ、
今日の観光は中止となり、旅館でゆっくり過すことになりました。
絶品のフグ料理に満杯の美酒、
悪天が幸いして宴会となり歌も沢山出ました。

城南宮曲水宴偶感

橋本 孝司

天地春光花草芳　　天地（てんち） 春光（しゅんこう） 花草芳（かそうかんば）し、

洛南神苑待流觴　　洛南（らくなん）の神苑（しんえん） 流觴（りゅうしょう）を待（ま）つ。

千年優雅惹情趣　　千年（せんねん）の優雅（ゆうが） 情趣（じょうしゅ）を惹（ひ）き、

万葉風懐余韻長　　万葉（まんよう） 風懐（ふうかい） 余韻長（よいんなが）し。

（訳文）

天も地も花も草も総て麗しく芳しい季節。城南宮を尋ねました。

偶々，神苑内では曲水の宴が、古式にのっとり、始まるところでした。

長い歴史を継ぎ重ねた優雅な情と趣が人の心を惹き、

万葉の先人の残した風流な遊び、衣装を凝らした賢人、文人の遊びに、心のなごむ一日でした。

初夏芦生散策　長谷川功

遊山翫水憶童時　遊山翫水　童時を憶い、
田野何邊聞子規　田野　何れの辺にか　子規を聞く。
戯向青天一吟發　戯れに青天に向って一吟発すれば、
忽生精氣賦新詩　忽ち生ず　精気　新詩を賦さん。

（訳文）

初夏の一日美山、芦生へ行き自然を散策、少年時代を想う。
林や田野の広がる、山間、何れの処か杜鵑の声が聞こえてくる。
我を忘れて青く晴れた天にむかって、詩吟を高らかに、
何だか元気が甦るようで、新しい詩を為さんと思う。

詠白銀蔵王

白銀嶽嶺映春陽
千樹霧氷寒烈蒼
飛雪舞風看不盡
仰瞻清景氣軒昂

八田 美子

白銀の嶽嶺 春陽に映え、
千樹の霧氷 寒烈として蒼し。
飛雪 風に舞うを 看れども尽ず、
清景を仰瞻して 気軒昂たり。

（訳文）

蔵王連峰の山々が陽春の旭に輝き、
厳寒の樹氷群（雪のモンスター）は蒼の世界である。
一瞬通り過ぎる風にきらめくダイヤモンドダストをあきる事なく眺めている、
清澄で華麗な銀世界を仰ぎ見ていると心から気持ちが高揚してくる。

光明寺雪景

林克宏

一陣朔風山霧晴　　一陣の朔風(さくふう) 山霧(さんむ)晴(は)れ
皚皚天地四無聲　　皚々(がいがい)たる天地(てんち) 四(よも)に声(こえ)無(な)し。
新粧玉樹光明寺　　新粧(しんしょう)の玉樹(ぎょくじゅ) 光明寺(こうみょうじ)、
古道閑吟踏雪行　　古道(こどう) 閑吟(かんぎん) 雪(ゆき)を踏(ふ)んで行(ゆ)く。

（訳文）

一陣の北風が吹いて、山の霧が晴れ渡ってきた。
あたり一面白い雪の天地、全く音の無い世界が広がる。
新雪に覆われた樹々の姿が美しい、清浄たる雪景の光明寺。
静かに、吟を楽しみながら雪の古道を踏みしめてゆく。

夏日追涼

林 幸子

溼氣氤氳汗自流
驕陽連日使心愁
芳香一啜納涼法
風送清聲颯似秋

溼気(じょくき) 氤氳(いんうん)として 汗(あせ) 自(おのず)ら流(なが)る、
驕陽(きょうよう) 連日(れんじつ) 心(こころ)をして愁(うれ)えしむ。
芳香(ほうこう) 一啜(いっせつ) 納涼(のうりょう)の法(ほう)、
風(かぜ)は清声(せいせい)を送(おく)りて 颯(さつ)として秋(あき)に似(に)たり。

（訳文）

蒸し暑さがひどく、汗が自然に流れてまいります。
毎日、夏のはげしい太陽が照りつけ、ゆうつな気持です。
芳ばしいお茶を飲むのが一番の清涼剤、
時折り吹いて来る風にも最早 秋の気配が感じられる。

想斉物論

林信孝

吾迎無恙杖朝年
吾迎う無恙杖朝の年、
(われむこ むよう じょうちょう とし)

一巻詩書落枕邊
一巻の詩書枕辺に落つ。
(いっかん ししょ ちんぺん お)

莊子座忘生計訓
荘子座忘生計の訓え、
(そうし ざぼう せいけい おし)

頽顔黄髪命祈天
頽顔黄髪命天に祈る。
(たいがん こうはつ めいてん いの)

(訳文)

私はたいした病気もせず、お蔭で八十才を迎えることが出来ました、
昨夜読んだ斉物論の一冊が枕元に落ちています。
荘子の訓えを生活の目標にしてきましたが、
老いた顔に白髪になった今は私の命は天に祈るばかりです。

流碑祭護国神社偶感

福岡　太郎

賀堂流祖賽来春　　賀堂の流祖賽し来たるの春、
神苑鎮魂碑碣隣　　神苑の鎮魂碑碣は隣す。
報国忠誠貫天命　　忠誠報国天命を貫き、
勿忘戦禍出征人　　忘る勿れ戦禍出征の人を。

（訳文）

毎年春の彼岸の頃に賀堂流、流碑祭が姫路護国神社（姫路城東）で執り行われます。
隣接して厳粛に立つ鎮魂の碑碣が流碑の横に在り私たち参拝者の目に入ります。
戦時中を懐古し、国家のために命を懸けた軍人さん、戦災で亡くなった人達の悲劇。
日の丸の旗を振って、出征する父兄を送ったことなど、忘れることなく、平和を祈ります。

消夏京都洛北　　福山 真知子

深溪冷氣拠牀川　　深溪(しんけい)の冷気(れいき) 牀川(しょうせん)に拠(よ)る、

洛北山頭避暑筵　　洛北(らくほく)の山頭(さんとう) 避暑(ひしょ)の筵(えん)。

脱却一心斯結社　　一心(いっしん)を脱却(だっきゃく)し 斯(ここ)に結(ゆい)の社(やしろ)、

輩流参詣貴船天　　輩流(はいりゅう) 参詣(さんけい)す 貴船(きぶね)の天(てん)。

（訳文）

涼しい深き渓に川床の趣きを味わう事が出来ました、
洛北の鞍馬山のあたりは実にすばらしい避暑地で満喫。
身も心も洗い流されたこの私、ふと古くからの縁結びの神に対し、
若い仲間たちがお参りしている光景に貴船の別天地に満足しました。

八重之櫻（新島襄の妻）　藤田　忠

鶴城陷落轉荒涼　　鶴城（かくじょう）　陷落（かんらく）　転（うた）た荒涼（こうりょう）、
揮涙入京同志堂　　涙（なみだ）を揮（ふる）ひ　京（きょう）に入（い）る　同志（どうし）の堂（どう）。
才子育成眞進取　　才子（さいし）の育成（いくせい）　真（まこと）に進取（しんしゅ）なり、
奥州英傑凛呼翔　　奥州（おうしゅう）の英傑（えいけつ）　凛呼（りんこ）として翔（かけ）る。

（訳文）

会津の鶴ヶ城は維新の戊辰戦争でついに落城し荒れ果てている。
八重は女性として唯一人戦に敗れ涙で京都に上京し同志社の学舎に入り新島襄と出会い結婚した。
その後、明治時代の文明開化に伴う学問や教育に携わり若者の養成に自ら進んで新しい物に挑戦した。
奥州の女傑としてキリッとした姿勢でこの時代を羽ばたいた。

巡山背古道

古川 元彦

天平古道爽清風　　天平の古道 清風爽かに、
千里田園香気充　　千里の田園 香気充つ。
山路徘徊訪遺跡　　山路 徘徊して 遺跡を訪ぬれば、
栄枯都邑寐荒叢　　栄枯の都邑 荒叢に寐る。

（訳文）

友と歩いた天平時代の古道は清らかな風が吹いていて、
小高い丘から眺めた広々とした田園には春の香気が充ちていた。
新緑の山道を遺跡を訪ねて回った、
栄枯盛衰を繰り返してきた都は今は生い茂った草叢の下に眠って平和を願っていることだろう。

高速公路裂緑野

本庄 武男

嘗聞唯自渡山風
今溢車騒不識終
白帯横林如蛇蠍
誰歓道路聳蒼穹

嘗て山を渡る風のみを聞く、
今 車騒溢れて 終わるを識らず。
白帯 林に横たわること 蛇蠍の如し、
誰か道路の蒼穹に聳えるを歓ばん。

（訳文）

嘗ては、山を渡る風のみが聞こえる場所だった。
今は、車の騒音が溢れ、終わることがない。
林を分断する高速道路の白い帯が、蛇か蠍のように横たわる。
高速道路が青空に聳えるのを誰が歓ぶことだろう。

看竹

前田 正子

天姿挺挺聳晴空
春色清暉滿竹叢
貞節虛心君子操
相如鐘磬響玲瓏

天姿 挺挺（ていてい） 晴空（せいくう）に聳（そび）え、
春色（しゅんしょく）の 清暉（せいき） 竹叢（ちくそう）に満（み）つ。
貞節（ていせつ） 虚心（きょしん） 君子（くんし）の操（みさお）、
鐘磬（しょうけい）に 相如（そうじょ）たり 響（ひび）き玲瓏（れいろう）。

（訳文）

青空に向かって立つその姿は気高く見えます、
春の竹林は清らかな光で満ちていました。
竹は古くから君子の心の在り方として崇められています、
時折聞こえる竹の音は鐘が鳴り響く音に似ています。

春日偶成

水木 静爽

緑樹陰濃揚翠煙
枯華満地色争鮮
鯉旗揺揺薫風舞
遊泳春城五月天

緑樹(りょくじゅ) 陰濃(かげこま)やかにして 翠煙(すいえん)揚(あ)がる、
枯華(こか) 地(ち)に満(み)ちて 色鮮(いろあざや)かを争(あらそ)う。
鯉旗(りき) 揺々(ようよう)として 薫風(くんぷう)に舞(ま)い、
春城(しゅんじょう)に遊泳(ゆうえい)す 五月(ごがつ)の天(てん)。

(訳文)

緑の樹が陰となしておい茂り煙がたちこむ、
枯れたはなは空しく地に色を残しながら散っている。
空には鯉のぼりがゆらゆらと風に舞い、
春の町一杯泳いでいる五月の天は実にすばらしい。

蓮花

溝畠 隆雄

蓮花浮水繞清池　　蓮花 水に浮かび 清池を繞る、
幽艶風光涼氣生　　幽艶たる 風光 涼気生ず。
欲盡碧荷秋色動　　尽きんと欲す 碧荷 秋色動く、
近聞鳥語雜流聲　　近くで聞く 鳥語 流声に雑じる。

（訳文）
　はすの花びらが池に浮かぶ清らかな池の辺を廻る、
静かに風にゆられて涼しさをはこんでくる。
はすの葉のみどりが早や秋の気配を感じさせてくれる、
耳をすますと鳥の鳴き声が周囲の雑音に混じって聞こえてくる。

祝孫高校入学

山際 和子

兒孫愛育十餘年
雄爽凛乎姿正賢
唯悔亡夫斯不識
櫻花祝共舞青天

児孫(じそん) 愛育(あいいく)し 十餘年(じゅうよねん)、
雄爽(ゆうそう) 凛乎(りんこ)として 姿正(すがたまさ)に賢(けん)なり。
唯悔(ただく)むらくは 亡夫(ぼうふ) 斯(ここ)に識(し)らず、
桜花(おうか) 共(とも)に祝(しゅく)し 青天(せいてん)に舞(ま)う。

（訳文）

幼い時から一緒に暮し育んできた孫が十五才になりました、
高校の制服姿は凛として頼もしい限りです。
唯残念な事はこの雄姿を主人が見られなかった事、
満開の桜が清天にはらはらと舞いこの期を共に祝うかの様でした。

過古稀吾想

半世星霜結善縁

夫妻共健愛情堅

貫穿初志晩年麗

懿愿誠心子孫傳

湯川 圭造

半世(はんせい)の星霜(せいそう) 善縁(ぜんえん)に結(むす)ばれ、

夫妻(ふさい) 共(とも)に健(すこ)やかにして 愛情堅(あいじょうかた)し。

初志(しょし)を貫穿(かんせん)して 晩年麗(ばんねんうるわ)し、

懿愿(いげん)の誠心(せいしん) 子孫(しそん)に伝(つた)えん。

（訳文）

過ぎた半世をかえり見れば、多くの善い縁によって仕事にも恵まれて、
結婚後の家庭も円満です。
初めに決めた事を多くの苦難を乗り越え、ようやく稔る、
子孫にはなにも残せないが、まじめに努力することを伝えたい。

耶馬溪

脇海道　聰子

商声颯颯仰山巓
光彩白雲霄漢懸
耶馬溪流飛水滴
一眸八景錦楓鮮

商声(しょうせい)　颯颯(さつさつ)として　山巓(さんてん)を仰(あお)げば、
光彩(こうさい)　白雲(はくうん)　霄漢(しょうかん)に懸(かか)る。
耶馬(やば)の溪流(けいりゅう)　水滴(すいてき)を飛(と)ばし、
一眸(いちぼう)　八景(はっけい)　錦楓(きんぷうあざ)鮮やかなり。

（訳文）

秋風が心地よい　山を見上げれば、
光りかがやく雲が大空に浮かんでいる。
水滴を飛ばしながら流れて行く溪流、
見渡すかぎりの紅葉、一眸八景そのものの耶馬溪でした。

夏日雑興

和田一栄

藕花漾水沼池泓
零露揺風霽色明
無影茅亭清寂處
香和幽馨誦経聲

藕花(ぐうか) 水(みず)に漾(ただよ)い 沼池(しょうち)泓(ふか)し、
零露(れいろ) 風(かぜ)に揺(ゆ)れて 霽色(せいしょく)明(あきら)かなり。
茅亭(ぼうてい)に影(かげ)無(な)く 清寂(せいじゃく)の処(ところ)、
香(かお)りは幽馨(ゆうけい)に和(な)ごむ 誦経(しょうきょう)の声(こえ)。

(訳文)

広々とした沼池に水が満ちあふれ紅い蓮の花が咲いている、
蓮の葉には玉露、時々風が吹き涼しさを感じる。
人影も無く、かやぶきのあずま屋の清らかでのんびりとした処、
何処からかお香のかすかな香りが漂い、読経の声が静かに流れている。

長岡京漢詩作詩研修会の歩み活動報告

1．研修会活動経緯及び研修内容

・吟道賀堂流長岡京吟詠会の有志によって立上げ。

・第1回開催：平成15年5月24日

・研修内容：漢文の知識と漢詩のあじわい方、漢詩作詩の基礎、
漢詩鑑賞、漢詩作詩の事例紹介と講評等

2．漢詩作詩研修会開催履歴

回数	開催日	開催場所	参加人員
1	2003/5/24（土）	中央公民館1階レクリエーション室	45
2	2003/8/2（土）	産業文化会館 3階2会議室	29
3	2003/11/30（日）	中央公民館1階レクリエーション室	37
4	2004/2/8（日）	婦人教育会館1階第5研修室	28
5	2004/5/22（土）	産業文化会館 3階2会議室	39
6	2004/8/21（土）	産業文化会館 3階 第1、2会議室	32
7	2004/11/13（土）	婦人教育会館2階会議室	29
8	2005/2/20（日）	産業文化会館 3階 第1、2会議室	33
9	2005/5/3（祝日）	中央公民館2階講座室	25
10	2005/8/21（日）	中央公民館2階講座室	30
11	2005/11/19（土）	中央公民館2階講座室	22
12	2006/2/12（日）	産業文化会館 3階 第1、2会議室	28
13	2006/4/30（日）	中央公民館2階講座室	26
14	2006/8/19（土）	中央公民館2階講座室	21
15	2006/11/25（土）	中央公民館2階講座室	23
16	2007/2/4（日）	産業文化会館 3階 第1、2会議室	39
17	2007/5/20（日）	産業文化会館 3階 2会議室	28
18	2007/8/18（土）	中央公民館2階講座室	27
19	2007/11/4（日）	産業文化会館 3階 第1、2会議室	40
20	2008/3/9（日）	中央公民館2階学習室2	35
21	2008/7/13（日）	中央公民館2階学習室2	35
22	2008/11/23（日）	中央公民館2階学習室2	30

回数	開催日	開催場所	参加人員
23	2009/1/11（日）	中央公民館２階講座室	64
24	2009/3/8（日）	中央公民館２階講座室	55
25	2009/5/10（日）	中央公民館２階講座室	50
26	2009/7/5（日）	中央公民館２階講座室	49
27	2009/9/27（日）	中央公民館２階学習室２	36
28	2009/11/22（日）	中央公民館２階講座室	45
29	2010/3/7（日）	中央公民館２階講座室	37
30	2010/7/18（日）	中央公民館２階講座室	31
31	2010/11/28（日）	産業文化会館 ３階 第１、２会議室	22
32	2011/1/30（日）	中央公民館２階学習室２	25
33	2011/3/6（日）	産業文化会館 ３階 第１、２会議室	24
34	2011/5/1（日）	中央公民館２階講座室	22
35	2011/7/3（日）	中央公民館２階学習室２	35
36	2011/11/19（日）	産業文化会館 ３階 第１会議室	16
37	2012/1/29（日）	中央公民館２階学習室２	25
38	2012/3/25（日）	中央公民館２階学習室２	20
39	2012/7/29（日）	中央公民館２階講座室	38
40	2012/9/2（日）	中央公民館２階学習室２	17
41	2012/11/4（日）	産業文化会館 ３階 第１会議室	18
42	2013/1/13（日）	中央公民館２階視聴覚室	21
43	2013/3/24（日）	中央公民館２階学習室２	18
44	2013/7/28（日）	中央公民館２階講座室	40
45	2013/9/1（日）	中央公民館２階学習室２	14
46	2013/11/4（月）	産業文化会館 ３階 第１会議室	

３．漢詩作詩初心者研修会開催履歴

回数	開催日	開催場所	参加人員
1	2007/4/15（日）	産業文化会館 ３階 第１会議室	30
2	2007/7/1（日）	産業文化会館 ３階 第１、２会議室	22
3	2008/1/13（日）	中央公民館２階学習室２	28
4	2008/5/4（日）	中央公民館２階講座室	34

回数	開催日	開催場所	参加人員
5	2008/9/28（日）	中央公民館２階講座室	24
6	2009/4/5（日）	中央公民館２階講座室	25
7	2009/10/4（日）	中央公民館２階学習室２	13
8	2010/5/2（日）	中央公民館２階講座室	25
9	2010/9/19（日）	中央公民館２階講座室	9
10	2011/9/4（日）	中央公民館２階学習室２	14
11	2012/5/3（祝日）	中央公民館２階学習室２	14
12	2013/5/3（祝日）	中央公民館２階学習室２	16

４．特別活動

(1)2005 年 3 月：「吟詠・漢詩交流特別訪中団」（寧波・天台山・桂林を訪ねて）の企画主催（第２回日中友好漢詩交流会交流記念漢詩集も発行）

(2)2006 年 9 月：特別史跡旧閑谷学校釈菜献詩応募（6 首）及び 10 月 28 日釈菜参加（4 名）

(3)2006 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の創刊号発行

(4)2007 年 9 月：当月より毎月、京都新聞の「乙訓文芸ひろば」に漢詩を掲載

(5)2007 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第二号発行

(6)2008 年 4 月：「吟詠・漢詩交流特別訪中団」（寧波漢詩交流と江南を巡る旅）の企画主催（長岡京市・寧波市友好都市締結 25 周年記念）

(7)2008 年 6 月：長岡京市文化協会教養生活部に加入

(8)2008 年 10 月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示

(9)2008 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第三号発行

(10)2009 年 1 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示

(11)2009 年 7 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示

(12)2009 年 10 月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示

(13)2009 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第四号発行

(14)2010 年 1 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示

(15)2010 年 1 月：文化講演会主催

(16)2010 年 6 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示

(17)2010 年 8 月：公民館ギャラリーに漢詩作品展示

(18)2010 年 10 月：「竹まつり」に漢詩作品展示

(19)2010 年 10 月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
(20)2010 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第五号発行
(21)2011 年 2 月：「第 4 回寧波漢詩交流会」（漢詩作品展示会も実施）
(22)2011 年 7 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
(23)2011 年 10 月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
(24)2011 年 11 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
(25)2011 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第六号発行
(26)2012 年 4、5 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
(27) 2012 年 10 月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
(28) 2012 年 11 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
(29) 2012 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第七号発行
(30) 2013 年 4 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
(31) 2013 年 10 月：中国旅行（湖南省と湖北省 6 日間）
(32) 2013 年 10 月：「市民文化まつり」に漢詩作品展示
(33) 2013 年 11 月：JR 長岡京地下道「市民ギャラリー」に漢詩作品展示
(34) 2013 年 12 月：漢詩集（古京風韻）の第八号発行

編集後記

鵜野　高資

今回の第八号はお陰様で吟道賀堂流京都本部牧水吟詠会の八名の諸先生方を合わせて五十名の皆様のご投稿をいただきまして刊行することができました。心よりお礼申し上げます。

又四名の初参加が得られたことも特筆されます。さて私事になりますが、主宰させて頂いております作詩三教室二十余名の大学生から現役サラリーマン、八十余歳からなる仲間は、年一度の京都新聞掲載や当機関誌投稿作品の作成で精一杯という方から毎月の例会に必ず二、三首持参される方迄様々です。ご自分の作品披露は出来ませんが、仲間の作品が皆の知恵を集めて仕上がっていく様子を聞いているだけでも楽しいです、という声も聞こえます。

旅行大好き、竹林整備に頑張る人、野鳥観察や蘭栽培が趣味の人、書画の先生方から画廊の主人、世情、世相に憂い強い人……様々な分野に精通された方が先生となるサロンは、作詩を超えた生涯学習の場になっています。いずれにしても作詩活動は人と人の出会いであり楽しみながら進めていけば作品数もその詩格も自ずから上がってくるものと考えています。ひとつの事例ですが皆様方におかれましても個々の手法によりご精進されますことを祈念いたし来号もより多くの作品が集まります事を期待します。

最後になりましたが、製本印刷において京都市洛南障がい者授産所の皆様に大変お世話になりました。厚く感謝申し上げます。

平成二十五年十一月吉日

漢詩作詩研修会

代表　小林　清夫

世話人　伊藤　鉄雄　福岡　太郎　鵜野　高資　加藤　弘
向井　美智子　中塚　喜代子　立林　好栄　川勝　芳三

古京風韻編集委員会

編集委員　伊藤　鉄雄　福岡　太郎　鵜野　高資　川勝　芳三
古川　元彦　櫛谷　元紀　林　信孝　北野　宗通

表紙揮毫　山本　保夫